

葬歌概論

—万葉集を中心に—

曾田友紀子

一 はじめに

人の死にかかわる歌は挽歌と総称されるが、類似する名称に葬歌や喪歌等があり、挽歌と同類の名称として混用する場合も多い。死を対象とした歌、生者の立場からの歌という点は共通するのであるから、些細な意味の違いに拘泥して細分化する必要はないものの、葬送の道行きや具体的祭式を織り込んだり葬地をながめて歌う内容をもつ一群の作品は、何らかの葬儀礼からんだ歌の存在を想定させ、挽歌と一括総称される以上のいくつかの特徴を指摘できると考えられることから、筆者は挽歌の一ジャンルとして「葬歌」を掲げる立場をとる。

本稿では、煩を厭わず葬歌と判断できる作品を万葉集の中から掲げてその様式と特徴をまとめ、葬歌の用いられた背景等につき考察を進める。

葬歌全体の鳥瞰は夙に上野理氏によってなされており、本稿はさまざまな点で氏の論を継承していることを予め申し述べておく。

二 挽歌の一ジャンルとしての葬歌

我が国の古代において、ある身分以上の者の葬礼は複葬で行われていたらしい。『魏志倭人伝』の

其死有棺無槨封土作家。始死停喪哭十余日。当時不食肉。喪主哭泣。他人就歌舞飲酒。已葬举家詣水中澡浴以如練沐。

という記事によれば、人の死後約十日間親族は精進し喪に服す一方、死者のために第三者は歌舞等を行い、死が確定した後葬ったことになる。また『古事記』上巻には天若日子が死した後、親族が「喪屋を作り」「日八日夜八日」「遊」んだという記事があり、『日本書紀』神代巻では同じ場面を「喪屋を造りて殯す」「八日夜啼び哭き悲び歌ぶ」と描いて、味相高彦根根が天若日子の「喪を弔ふ」こと

を記しており、死が二段階に分けて扱われ、それぞれに付随する行事が存在したことがわかる。

記に残る天皇の喪礼も、第一次の喪にあたる「殯」に関する記載と第二次の「葬」に関するものとならなっていることが多く、そのうち、発哀、誄、歌舞等の盛大な儀礼の記事があるのは前者であり、後者は葬地や埋葬の年月を記するにとどまる。なかには、葬に関する記載のない天皇もある。死が確定していない段階にあたる「殯」ではタマフリのために種々の祭礼を行うのに対し、死が決定した後の葬送と埋葬とを軸とする「葬」には、記載すべき行事に乏しかったのだから。皇位継承等に絡んだ政治的な意味も含めて注目されるのは、殯宮の期間とそこでの出来事であり、葬の時期にはすでに崩御後争点となる問題は決着していた。王権の拡充につれ、その威光を示すべく殯儀礼はますます長期間にわたって盛大に催されるようになり、相対的に葬儀礼にかかる比重は小さくなっていったうだ。

このように変化する葬喪儀礼のなかで、歌はどのような役割を担っていたのであろうか。不分明な点もあるが、少なくとも儀礼の周辺に広がる私的な場面で、死者を悼み、遺族を慰めるためのさまざまな「挽歌」が生み出されていた。例えば発哀や誄に準じて作られた柿本人麻呂のいわゆる殯宮挽歌は、殯宮に奉仕する多くの聴衆を意識して発せられている。実際の発表の場は殯庭ではなかったはずのそれらの奏でる「代表的感動」は、公的私的を問わず、死を悼む多くの心を慰めたに違いない。異伝の多くは、それらが一回限りの披露に終わらず、幾つかの段階を経て故人を偲ぶ節目に日や季節の折々や、ときに他者の死にあたってにも繰返し享受されていたことを示しているであろう。それに対して「葬」にまつわる歌は従来、ほとんど顧みられることはなかった。『古事記』景行天皇代に倭建命の葬送に際してその後御子らが歌ったとされる「大御葬歌」四首を、

是四首、皆歌其葬也。故至今其歌者、歌天皇之大御葬也。

とする記載を字義通り受け入れられるかについては、周知のように未だ定説をみない。葬は、殯に付随する二義的儀礼であつたとしか想定できないのである。

しかし、「殯」と殯宮挽歌との関係にあたるような何らかのかたちで「葬」に結び付く歌は記紀歌謡、万葉集を通して点在し、万葉集では、挽歌と分類されるなかに殯に関係してつくられた作品と同様、葬に関連すると判断できる歌が相応に認められる。最前の大御葬歌はひとまずおくとしても、それ以外に葬にかかわりその周辺に生きていた歌を「葬歌」として認め、人の死を扱う「挽歌」という大きな歌分類のなかの一つのジャンルとして位置づけることは可能である。

土橋寛氏は最前の二段階に歌われる歌をそれぞれ「殯歌」、「葬歌」と命名され、「死者に対する悲しみの感情を歌った抒情詩を指す語」としての「挽歌」と区別されている。氏によれば、「殯歌」と「葬歌」の分類は儀礼の場の違いに基づくもので両者は「喪歌」として一括されるのに対し、「挽歌」は人の死にかかわる歌全般をさす性格上の分類項目として「喪歌」と対をなす名称となる。葬礼の儀礼歌を二分割した名称は明快であるが、挽歌と一對をなす儀礼歌の総称としての「喪歌」という造語はなじまないで、本稿ではとらない。歌の儀礼的側面を認めつつ、その周辺に広がる私的な場面における享受をも含めた「葬歌」の性格を次の段で考えていく。

三 葬歌の性格

題詞や左注から製作時の状況は推測できる葬歌の分かりやすい例として、河島皇子挽歌を次に掲げる。左注に注目して欲しい。

A 柿本朝臣人麻呂献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首并短歌

飛ぶ鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ觸らばふ
玉藻なす かよりかくより 靡かひし 孀の命の たたなづく 柔肌すらを
劔刀 身に添へ寐ねば 烏玉の 夜床も 荒るらむ一云荒れなむ そこ故に
なぐさめかねて けだしくも 逢ふやと思ひて一云君も逢ふやと 玉垂の 越智
の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅寝かもする
逢はぬ君ゆゑ(2・一九四)

反歌一首

敷妙の 袖交へし君 玉垂の 越智野過ぎ去く またも逢はめやも

一云越智野に過ぎぬ(2・一九五)

右或本曰 葬河島皇子越智野之時 献泊瀬部皇女歌也 日本紀云 朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑浄大参皇子川嶋墓

左注は、この歌が河島皇子の薨去後越智野に「葬」した折に、遺された妻である泊瀬部皇女に人麻呂が献じたとする或本があつたことを伝える。「葬」時とは葬列が移動する最中というのでなく、前段で触れた第二段階にあたる「葬」の儀礼の終了またはそれ以降、葬送に携わつた死者に親しい人々が集う場においてというほどの意味だろう。

天智天皇崩御の際に額田王の作つた挽歌では

B 従山科御陵退散之時額田王作歌一首

やすみしし 我が大君の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜は
も 夜の盡 晝はも 日の盡 ねのみを 泣きつつありてや 百磯城の 大宮
人は 行き別れなむ(2・一五五)

と歌われていて、埋葬終了に際して人々の心をまとめ、いたわり、散会の契機として歌が用いられていたことが分かる。壬申の乱を控えていた天智の場合は、その殯宮も山科にあつて御陵が完成をみないうちに慌ただしく埋葬しなければならなかつた事情があり、殯宮儀礼の終了や御陵完成についての記述は日本書紀になく、やや特殊であるかもしれないが、「山科の 鏡の山に 夜はも 夜の 盡晝はも 日の盡 ねのみを 泣きつつありてや」と陵に仕えつつ嘆き明かした近親者や側近の人々の姿を描いて「大宮人は 行き別れなむ」と葬礼の終了を告げる内容は、歌に託されていた実用的な機能によるものである。

翻つて、「玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひづち 夕霧に 衣は濡れて草枕 旅寝かもする」と皇子の妃であつたとされる泊瀬部皇女の御陵に奉仕する姿を描き、反歌では「越智野過ぎ去く またも逢はめやも」として、皇子の靈魂が葬地を通過したこと、あるいは葬地に赴いたことを告げてこの歌と近似する内容をもつ河島皇子挽歌もまた、そのような側面をもつ歌であつたと考えられる。ただ、三箇所にわたる異伝は河島挽歌が一回限りでなく複数回にわたつて用いられたことを伝え、葬儀礼の一部というより、故人を偲ぶ折々に重ねて歌われていたと考えられる。額田王の作歌年代より約二十年を経て、葬儀礼も変容し、それにかかわる歌の果たす役割にも変化がもたらされた。繰り返しの鑑賞に耐える河島挽歌の表現性は、儀礼性を優先させる額田王の歌には要求されなかつた部分で

あり、左注が「或本云」というのも、一回性の儀礼歌としてより法会等において披露された歌という印象の強さの反映であろう。儀礼およびその周辺というのは、このような歌の扱われ方をさす筆者なりの謂である。

河島皇子挽歌は、柿本人麻呂による他の挽歌と異なり、死者よりもむしろ生者に向かつて歌われている。日並皇子、高市皇子、明日香皇女いづれの場合も、冒頭から多くの句を費やして亡き皇子女の生前の姿を讃え、死者に「わが大君」と訴えかける形式をとるこれらの殯宮挽歌に対して、当該歌では、玉藻の序による歌いおこしから睦まじい夫婦の共寝が叶わなくなったことに続けて遺された妻の悲嘆の姿に至るまで泊瀬部皇女を中心とする文脈が続き、亡き河島皇子に対する呼びかけも讃える語句も見当たらない。重点は遺された妻を描くところにあり、題詞すら死者名を記さず、遺族である泊瀬部皇女と忍坂部皇子二人に人麻呂が献じた作品であるという。死者でなく遺族に献呈された点で異例とされる題詞の中に、「殯」ではなく「葬」にかかわる当該歌の姿がほの見えるといべきであろう。前者においては、生前の功績と死者への敬意をとりあげ、周囲の期待がかなわなくなった無念を訴える対象は死者しかあるまい。殯宮挽歌が歌いかける対象は、確かに死者であった。だが、埋葬が終了し死者が他界へと去った後者の段階に至れば、呼びかける直接の対象とするにはもはや遠すぎる。死者に対して遺された者の嘆きを歌うのが「殯」の歌であるとすれば、葬送や埋葬の中心にならざるを得ない遺族を歌うのが、「葬」の歌であったのではなからうか。

志貴親王挽歌を例にとろう。

C 霊龜元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌

梓弓 手に取り持ちて 大夫が さつ矢手ばさみ 立ち向かふ 高円山に 春
野焼く 野火と見るまで 燃ゆる火を いかにと問へば 玉梓の 道来る人の
泣く涙 こさめに降り 白妙の 衣ひづちて 立ち留まり 吾に語らく 何し
かも もとなとぶらふ 聞けば 哭のみし泣かゆ 語れば 心を痛き 天皇の
神の御子の いでましの 手火の光そ ここだ照りたる (2・二三〇)

短歌二首

高円の 野辺の秋萩 いたづらに 咲きか散るらむ 見る人なしに (2・二三

一)

三笠山 野辺行く道は こきだくも 繁り荒れたるか 久にあらなくに (2・

二二二)

右歌笠朝臣金村歌集出。

或本歌云

高円の 野辺の秋萩 な散りそね 君が形見に 見つつ俣はむ (2・二三三)
御笠山 野辺行く道 こきだくも 荒れにけるかも 久にあらなくに (2・
二三四)

題詞に記されている通り、皇子の薨去は元年八月、葬礼が同年九月であると考えられるので、「葬」に関する儀式は薨去後一箇月前後に催されていたことが当該挽歌の存在によって確かめられる。或本歌と本文短歌との前後関係についての定説はないが、諸注釈をそろって皇子の密葬と本葬とのいづれかにあてはめて披露の時期を考察しており、「葬」にかかわる歌としてとらえている点は共通する。

長歌は、葬送の列を目撃した第三者に問われて「道来る人」が嘆きを切々と訴え、「天皇の神の御子」の薨去を告げる。死者への称賛も呼びかけもなく、代わって葬送に加わった人間の思いが本人自身の言葉によって直截伝えられるといふかたちである。葬列の手火の光と参列した者の嘆きとが印象に残るばかりの文脈は問答体によって構成され、死者に関する表現は、その名すら明かされないほど背後に押しやられている。このような死者よりも遺族に焦点を絞ってその嘆きを鮮明に描こうとする形式は、Aの河島皇子挽歌と同じ作意に基づくものであろう。

もとより、「葬」の中心にある遺族が儀式およびその周辺で自らの心境を歌うにあたっては、何らかの問いかけや前提が必要ではなかつたらうか。問う者と問われる者との関係や問答体の様式、また遺族と問答者が相対する具体的な場の問題等については別稿を期するものの、第三者の立場から遺族の姿を描き、またその呼びかけに応じて心情を吐露する遺族の対応の在り方は、問答以外の唱和なども含めて河島挽歌にも見られる「葬」にかかわる歌の一つのかたちである。

Bの額田王の天智天皇の御陵退散時の挽歌も、そこに奉仕していた人々の嘆きを客観的に描いていて、遺族からの視点ではない。いったいに、「葬」にかかわる歌の中で儀礼終了後間をおかず遺族が悲しみを直接歌ったと思われるものは稀である。肉親の死に遭遇する悲劇に見舞われた直後の遺族が、自身の心やりを積極的に歌い始めるのは憚られるような葬に関わる状況¹⁾とえば悲しみをうたうには死の穢れを払拭する意味での第三者の呼びかけが必要としたとか、問答客と遺族との間でとりかわされる挨拶との関係とか²⁾があつたのではないかと筆者は考えている。問う者と問われる者との関係や問答体の様式、また遺族と問答客と

が相対する具体的な場の問題等も含めて、この部分については後考を俟つ。

短歌では一転して、主を失った親王遺愛の萩の開花や宮道の荒廃を歌い、親王の薨去から時間が経過する中で、形見としての萩やかつての住まいを愛で亡き人を偲ぶ近親者の心境を歌う。高円山は皇子の宮殿のあった地とも別業の地ともいわれる葬地である。そこに「見る人なしに」萩が散るとして皇子の不在を嘆く短歌は、「越智野過ぎ去くまとも逢はめやも」と亡き人の逝きて帰らぬことをうたう河島挽歌の反歌と似通う表現である。葬地を読みこんで、故人を偲ぶ葬歌は短歌のみのかたちで万葉集中に確認できる。たとえば、

D 移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌二首

うつそみの 人なるわれや 明日よりは 二上山を 弟と吾見む(2・一六五)

磯の上に 生ふる馬酔木を 手折らめど 見すべき君が ありと言はななくに(2・一六六)

右一首今案不似移葬之歌 盖疑従伊勢神宮還京之時 路上見花感傷哀咽作此歌乎

では、謀叛の罪で死を賜った大津が処刑地である磐余の詠語田から都の果ての葛城の二上山に葬せられた時の歌と、題詞にある。「うつそみ」の身である大来が弟大津の葬地を歌う一首めと「見すべき君」の不在を歌う二首めとは、Cの反歌一首め(2・二二二)の内容を二分している感もある。

先掲の上野論文ではさらに、

E 但馬皇女薨後穂積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流涕御作歌一首

ふる雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒からまくに(2・二〇三)

F 河内王葬豊前國鏡山之時手持女王作歌三首

大君の 親魂あへや 豊國の 鏡山を 宮と定むる(3・四一七)

豊國の 鏡山の 石戸立て 隠りにけらし 待てど来まさず(3・四一八)

石戸割る 手力もがも 手弱き 女にしあれば すべの知らなく(3・四一九)

G

隱國の 泊瀬の川の 上つ瀬に 鶺鴒を八頭漬け 下つ瀬に 鶺鴒を八頭漬け 上つ瀬の 年魚を昨はしめ 麗し妹に 鮎を取らむと 麗し妹に 鮎を取らむと 投ぐる箭の 遠離り居て 思ふそら 安けなくに 嘆くそら 安けなくに 衣こそば それ破れぬれば 継ぎつつも またも合ふといへ 玉こそば 緒の絶

えぬれば 括りつつ またも合ふといへ またも逢はぬものは 孀にしありけり(13・三三三〇)

隱國の 泊瀬の山 青幡の 忍坂の山は 走り出の 宜しき山の いで立ちの 妙しき 山ぞ 惜しき山の 荒れまく惜しも(13・三三三一)

高山と 海とこそば 山ながら かくも現しく 海ながら 然ただならめ人は花ものぞ うつせみ世人(13・三三三二)

なども葬歌として扱っている。従うべきであろう。葬が完了したときに、葬地である山を歌って思う人の不在を嘆く。三首からなるGは、古来葬地として名高い泊瀬地方に伝わる葬歌の一つであり、上野氏により「泊瀬葬歌」と命名されたその一首めは、本来つまを亡くした遺族でなく、その姿を外側からうたうことのできる第三者によってうたわれたものであったであろう。二首めの歌こそ、葬地である泊瀬をうたった遺族の歌であり、三首めは、前二首が遺族の歌と理解されるようになってからの吊問する側の歌として付加された歌であるに違いない。泊瀬の川と海とからなる組歌をまとめあげるような口吻と人間のまぬがれ難い死に対する内容からそのように読みとれる。

以上、河島皇子挽歌を手がかりに「葬」周辺の歌を、万葉集の中に見てきた。その特徴は、

(1) 長歌または組歌形式の歌では、第三者と遺族との間の問答や唱和の形式をとる。

(2) その場合、死者の賛美や追悼でなく葬礼に携わる遺族の慰撫が主題となる。

(3) 短歌形式の作品では、葬地をうたい、死者の不在を遺された人間が嘆くことが中心となる。

(4) いずれの場合も、これらの歌々は一回性の作品としてでなく、死者を偲ぶ折々に繰り返して愛唱され歌い継がれていたのではないかと想定される。

おおよそこのように整理できるだろう。さらに、葬歌の対象となった死者について新たにう項目を特徴として付け加えることができそうである。

四 鬚りある死と葬歌

前段で紹介した作品の対象となる人物の薨年その他死の前後の状況を、簡単に紹介しておこう。

A 河島皇子

天智天皇第二皇子。持統五年（691）九月薨去。天武十年忍坂部皇子らと帝紀及び上古の諸事を記し定め、同十四年浄大参位を授けられる。万葉集によれば天武天皇皇女である泊瀬部皇女の夫。懐風藻の伝によれば、大津皇子と莫逆の契りをなしていたがその謀叛を密告し、当時告発の是非を問われたことが記されている。

B 天智天皇

天智九年（670）十二月三日崩御。殯の開始は十二月十一日。殯の終了と葬に関する記載は、書紀にない。天智天皇陵が整備されたのは文武朝に入ってからのことと推測される。

C 志貴親王

天智天皇第七皇子。光仁天皇父。万葉集によれば靈龜元年（715）、書紀によれば靈龜二年八月薨去。薨奏延期説に従うと、親王の薨去は元明天皇即位の前月にあたるため、当初密葬されたことになる。持統三年撰善言司に任ぜられ、慶雲四年文武天皇崩御の際殯宮の事を供奉した。靈龜元年二品を授けられる。宝龜元年十月、田原天皇と追尊。

D 大津皇子

天武天皇第三皇子。母は大田皇女。大伯皇女の同母弟。朱鳥元年（686）十月賜死。天武十二年朝政に関与し、天武十四年正浄大弑位を授けられる。常に草壁皇子に次ぐ地位にあり信望も厚かったが、朱鳥元年天武崩御に伴い謀叛を企て、発覚、直ちに捕らえられ翌日刑死。河島皇子の密告により発覚したといわれる。幼時より文才に秀で、天智天皇に愛された。書紀、懐風藻は皇子の非凡な才能と魅力とを伝える。

E 但馬皇女

天武天皇皇女。穗積皇子、高市皇子らの異母妹。和銅元年（708）六月薨去。万葉集によれば、高市皇子の宮にありながら穂積皇子と密会し、また穂積を思う歌を残している。

F 河内王

朱鳥元年、新羅からの客をもてなす接待役として筑紫に遣わされる。持統三年筑紫大宰帥に任ぜられ、以後当地で任にあたる。同八年（694）浄大肆位と賜物とを贈られる。豊前国鏡山に葬せられる。

B の場合は、葬歌とただちに判断できない。天智崩御に端を発する壬申の乱へ向かう雰囲気の中で、御陵の造営と殯宮行事とが並行して行われ、殯儀礼の途中であるいは風雲急を告げる事態となって額田王の歌が要請されたと考えられる。すると、B は殯の半ばで葬も終了せざるを得ない状況下の特殊な例であり、大化改新という偉業を成し遂げた天智の葬礼とは称し難い終幕である。C の志貴親王の薨年には不審がある。元明天皇の異母弟にあたる志貴は、次代の元正が即位する靈龜元年九月直前に薨去した。同年六月の長皇子、七月の穂積皇子の相次ぐ薨去の上に即位直前の八月、新天皇の叔父にあたる志貴が薨去したのを、吉事の前凶事として当面伏せておきたかった朝廷側の事情があったとみられる。また、天武系の諸皇子が繁栄するなかで天智系の諸皇子の処遇もどのようなものであったのだろうか。A の河島の場合と合わせて、無視し得ない要素だろう。仮に親王の薨去が書紀の記す靈龜二年であっても、その殯がどれほどの規模で催されたかには疑問が残るところである。D の大津皇子の場合は、謀反、捕縛、刑死という運命をたどって殯も葬も許されなまま、皇子の妃山部皇女が殉死するという痛ましい事件もひきおこした悲劇的結末に終わっている。B・C・D の作品の対象となった人物は、いずれも生前の業績や身分にふさわしい殯が営まれたとはいえない。

また、A の河島には、大津皇子と莫逆の契りを交わしながら天武崩御後謀反を密告したとして芳しからぬ風評があった。「懐風藻」の伝には
朝廷嘉其忠正。朋友薄其才情。議者未詳厚薄。然余以為。忘私好而奉公者。忠臣之雅事。背君親而厚交者。悖德之流耳。但未盡爭友之益。而陷其塗炭者。余亦疑之。

とあって、当時、大津皇子を告発した是非をめぐる河島の人間性が問われていたことが窺える。日並はじめ天武系皇子女の薨去の際に殯宮挽歌を奉っていた柿本人麻呂が、河島の際には遺族にあたる泊瀬部皇女とその兄である忍坂部皇子に献呈するかたちをとって直接薨去した河島の名前を挙げていないのも、河島に対す

る微妙な世論と無縁ではなからう。その意味では、高市皇子に愛されその宮に住まいながら穂積皇子との恋愛が取り沙汰されたEの但馬皇女にも、同様の事情があったといえる。万葉集には皇女の歌として、

但馬皇女在高市皇子宮時思穂積皇子御作歌一首

秋の田の 穂向きのよれる 片寄りに 君に寄りなな 言痛くありとも

(2・一一四)

勅穂積皇子遣近江志賀山寺時但馬皇女御作歌一首

遅れ居て 恋ひつつあらずは 追ひしかむ 道の隈廻に 標結へ吾が背

(2・一一五)

但馬皇女在高市皇子宮時竊接思穂積皇子事既形而御作歌一首

人事を 繁み事痛み 己が世に 未だ渡らぬ 朝川渡る (2・一一六)

という三首を載せる。いずれも情熱的な許されざる恋の意匠で詠まれていて逆にその真偽のほどが疑われるが、恋物語の相手である穂積皇子にとって、殯に近い時点では何もすることができないまま、皇女の葬地に思いを馳せる歌を読むしかなかったと解することもできる。高市の薨去後、十年以上存命した但馬と穂積とがその後どうなったか伝わらないのであるから、安易に二人の関係を詮索するのは控えるべきだろうか。他に一首ある但馬皇女の歌の、

言繁き 里に住まずは 今朝鳴きし 雁にたぐひて行かましものを

(8・一五一)

このような内容には世間の厳しい眼差しが感じられるのであるが。

最後の、王の身分で都以外の地に葬られたFの河内王の殯が相応に営まれた保証はなく、鏡山に埋葬された後、妻であったと考えられる手持王が歌った三首から詳しい事情を知ることにはできない。Fについては解釈を保留しておきたい。

以上概観してきたように葬歌を奉られる死者の多くには外因、内因の違いはあっても死をとりまく状況について特別な事情があって、身分相応の殯が催されなのまま終わっている。そのような場合に、遺族を中心とする葬儀礼の周辺で歌われたのが葬歌であったと考えられるのである。

河島皇子や志貴親王、大津皇子ら葬歌の対象となっている皇子たちは、いずれも政治的には不遇であった。皇族として高い地位にありながら、かえってそれ故に反主流とも称すべき立場に身を置かなければならない運命を生き、薨じていった人々である。または、世間を騒がせ、倫理や良識に反する生き方を選んだ皇族

という括り方も可能である。冤罪であったにせよ大津は謀反、忠正を嘉されても河島は背信、また但馬は二人の異母兄から同時に愛されるという背徳、薨去自体が凶事と見做された志貴という具合に。何らかの意味でその生き方に翳りを感じさせる人物である。亡き人を讃え、その生前を偲び、死を傷む殯では、不都合があったとしても無理からぬことであろう。

殯が完全に営まれ得ない場合に、葬はその空白を埋めるべく一時的に伸長するとは考えられないだろうか。殯で尽くされなかった死者への哀悼が代替措置として葬周辺で遺族の慰撫というかたちを以て充足する。死者を偲ぶよすがとして遺族の倍旧の思いを託す葬歌は、その後も繰り返し愛唱される。もちろん、葬歌はそのような特殊な場合にのみ用いられたのではなく、一方でGでみたように謡い物としても流布した長歌形式としても愛され、古来葬地として名を馳せた地には殯と直接連動しない葬歌の伝統が息づいていた。だが、大陸伝来の殯儀礼の大きな影響を受けて葬礼の中心が殯におかれる時代が到来してもなお、葬歌の様式を継承して文芸的に開花させた歌々が生み出される背景には、叙上のごとき事情が存在したのである。

前段で紹介した葬歌の特徴に、

(5) その対象とされる人物には、葬の前段階にあたる殯儀礼が充分尽くされ得

なかった状況が考えられる。

という一項目を加える所以である。

五 おわりに

七世紀後半以降、葬儀礼は大きく変容する。天皇葬にも及ぶ火葬の急速な浸透、仏式法会の普及等、欽明朝以後の殯宮儀礼の記事の増大とあわせて従来とは異なる場における多様な歌を要請した。そのことは新しい様式をもった歌の誕生を促すのと同時に、古来継承されてきた伝統的な歌の復活、再生をはかる原動力としても働いた。殯にかかわる歌とは主題を異にする伝来の葬歌を詩的に再生させた作品が、河島皇子挽歌であり志貴親王挽歌であった。それらの反歌にも含まれる葬所を望んでの歌は、単独でも用いられる普遍的な葬歌の一種であり、愛する者を失った遺族の悲痛な声がかまます大伯皇女や穂積皇子の作は、伝統の形を踏まえながら、自由な発想以上に強い感動を呼び起こす力を獲得した作品といえるだろう。葬歌はこの時代、新たな意匠と高い文芸性のもとに挽歌の一ジャンル

として再認識されたのである。
 なお、万葉集の作品に認められる特徴は、記紀歌謡の葬歌にも共通する。別稿を予定している。

- 注1 「河島皇子葬歌の構成―葬歌の達成と消滅―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第34輯 平成元年1月
- 注2 伊藤博『萬葉集の歌人と作品上』昭和50年4月 276頁
- 注3 『古代歌謡の世界』昭和43年7月 177頁
- 注4 「河島皇子挽歌の手法―葬歌との関係から―」『古代研究』18号 昭和61年3月
- 注5 志貴親王の薨去について、『統紀』は靈龜二年八月(九日(親王忌齋)、十一日(親王薨日))とする一方、当該題詞では靈龜元年とされていて、八月薨去、九月葬送としても一年のずれがある。その原因は、靈龜元年九月の元正天皇即位と、同年六月の長皇子薨去、七月の穗積皇子薨去に続く八月の志貴皇子薨去の重なりを求める薨奏延期説によって理解できるだろう。
- 注6 或本歌を長歌とは別個の作品とし本文歌に先行して成立したと考える立場と、或本歌は本文歌成立後の作とする立場とがある。前者の論として、伊藤博氏「第一人者の宿命―笠金村の技法」(『日本文学』19巻12号 昭和45年12月)があり、後者の論として、小野寛氏「笠金村の歌集出歌と或本歌」(『論集上代文学』第6冊 昭和51年所収)等がある。
- 注7 その長歌が前半と後半とで問答のかたちをとることについては、橋本達雄氏の論(『人麻呂作「獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌」の考』『萬葉』64号 昭和42年7月)がある。また、前掲拙稿でも氏とはやや異なる立場で問答体をとると述べた。
- 注8 注1の論と同じ。
- 注9 岸本由豆流『萬葉集攻證』以来の説を、伊藤博氏(前掲論文)が、作品の形成過程と重ねて読み解こうとし、村山出氏が「題詞の薨年が単純に否定されるべき性質のものではない」と補強した(『志貴親王挽歌論―その成立と背景をめぐって―』『萬葉集研究』第9集 昭和56年所収)。
- 注10 笹山晴生「『従山科御陵退散之時額田王作歌』と壬申の乱」『国文学』昭和53年4月号
- 注11 古事記の軽太子物語にも「こもりくの 泊瀬」の山と川との冒頭部をもつ組歌(記八九・九〇)があり、同趣の泊瀬葬歌が他にもあったと考えられる。

General Thoughts Regarding Funeral Songs

— On Selections from Man'yōshū —

Yukiko SODA

In ancient Japanese literature, songs related to death are generally called “banka,” (elegies.) I take position that there exists a genre of funeral songs among them. I considered selections in this category from Man'yōshū, the oldest Japanese anthology, and tried to define and sum up their characteristics. In the process, I was able to discern another feature of these songs. In many cases, it can be conjectured that the deceased persons depicted in this type of song have something in common. That is to say, there must have been some obstacles preventing survivors from expressing their grief or lamenting the deaths openly. This can be explained from the unique style of expression of these funeral songs, which focuses on the description of the sorrow of the bereaved family rather than on the glory of the deceased.

キーワード：万葉集、挽歌、殯、葬、死

* 一般科助教授

原稿受付 1997年9月30日